

## 論文内容の要約

論文名	勤労者におけるうつ病早期の疾病性と事例性についての検討
氏名	小林 由実
<p>【目的】近年、勤労者における精神疾患患者数は増加しており、特にうつ病患者の増加が著しい。職域におけるメンタルヘルス推進の第一歩は、うつ病をはじめとする精神障害を誰もが発症しうることを認めた上で早期に発見し適切に対応することであり、治療や再発防止において、また社会の健全な発展を図るという観点からも重要である。早期発見、早期対応のためにはセルフケアや管理監督者のラインによるケアなど、当事者とその周囲の人々の気づきが重要であるが、勤労者の疾病性や事例性の気づきについてこれまで系統だった研究は行われていない。本研究では、うつ病の勤労者の職場での症状や初期兆候について、主観的および客観的な気づきについて調査および検討し、適切な介入方法について考察することを目的とした。</p> <p>【対象】平成23年から平成25年までの期間、大阪市立大学医学部附属病院神経精神科およびならこころのクリニックに通院中のうつ病と診断された勤労者93名を対象とした。</p> <p>【方法】うつ病発症時にどのような症状および状況を自覚したか、また誰にどの症状および状況を最初に指摘されたかについて、自己記入式質問表を用いて調査した。研究目的、データの使用方法、個人情報への配慮などを示し同意を得た上で使用、回収し、統計学的処理を行った。</p> <p>【結果】主観的に最初に自覚した症状は「気分の落ち込み」が最も多く、最初に自覚した状況で最も多かったのは「上司・同僚との人間関係の悪化」であり、コレスポネンス分析を用いた結果この組み合わせが早期に自覚されやすいことが示された。また客観的視点として、最初に指摘された症状では「気分の落ち込み」を「上司」から指摘される事が多く、状況では「ミスが増えた」ことを「上司」に指摘される事が多いことが示された。</p> <p>【結論】これらの結果から、うつ病の中核症状である「気分の落ち込み」は早期から自覚されていることと、ラインによるケアの重要性、特に上司からのサポートの重要性が確認された。</p>	